エッセイ　楽しい“虫音楽”の世界（その1『ファーブル昆虫記』の音楽）

昆虫芸術研究家

柏田　雄三（かしわだ　ゆうぞう）

画家の安野光雅氏がフランスを訪ねるテレビ番組を観ていたら，ジャン・アンリ・ファーブル（1823～1915）が作曲した＜セミ＞＜コオロギ＞＜ヒキガエル＞という題名の曲が流れていた。彼が曲を作っていたことは知っていたが，耳にするのは初めてのことである。

専門家でない人が作曲したのはフリードリヒ大王，マリー・アントワネット，ニーチェなどの例を見ればそれほど珍しいことではない。

ファーブルは植物学・数学・物理学などの本も書きノーベル文学賞の候補になったほど多才な人だったが，彼の曲は平凡なものであった。彼自身のことすらフランスでは余り知られていないそうで，そのテレビ番組でも「ファーブルを知っているか？」と何人もの人に訊くシーンがあった。日本ではファーブルのことは子供も良く知っていて『ファーブル昆虫記』のミュージカルが作られるほど有名なのに不思議なことである。

その『ファーブル昆虫記』には後世の専門の作曲家が作った音楽がある。

ファーブルと同じフランス人のアルベール・ルーセル（1869～1937）の≪蜘蛛の饗宴≫は『ファーブル昆虫記』に触発され1912年に作られたバレエ音楽である。全曲版は＜前奏曲－庭＞＜アリの登場＞＜糞虫の登場－蝶の踊り＞＜蜘蛛の喜び－蜘蛛の踊り＞＜シンクイムシの登場＞＜戦闘的な二匹のカマキリ＞＜アリのロンド＞＜カゲロウの孵化＞＜カゲロウの踊り＞＜カゲロウの疲れ＞

図-1　ルーセル≪蜘蛛の饗宴≫　NAXOS　8.572243

＜カゲロウの死＞＜カゲロウの葬送＞の小曲からできている。庭に巣を作る蜘蛛とその餌になる昆虫たち，蜘蛛を狙うカマキリ，神秘的なカゲロウの一生が描かれている。

そのものズバリ≪ファーブル昆虫記≫という名の曲もある。山田栄二（1948～）の8本のホルンのための組曲で＜ウスバカマキリ＞＜ツチハンミョウ＞＜オオモンシロチョウ＞＜ムナゲモンシデムシ＞＜バッタ＞の5曲から構成されている。＜ウスバカマキリ＞はAllegro＜ツチハンミョウ＞はAndantino＜オオモンシロチョウ＞はTempo de Valseといった具合に虫にピッタリの表情記号が付けられ，2002年に作られたばかりの現代の曲なのにどの小曲にも親しみやすい虫の表情が見える。作曲者は虫好きで『ファーブル昆虫記』を読み直して愛情を持って作曲したそうだ。ルーセルの曲がどちらかと言うと雰囲気を表すオーケストレーションを楽しむのに対して，山田の曲は具体的に虫の生態を表した曲だと言えよう。ファーブルが聴いたらきっと喜んだことだろう。